第四章　わたしが陽キャになれるわけないじゃん、ムリムリ！（※ムリじゃなかった!?）

#第四章　わたしが陽キャになれるわけないじゃん、ムリムリ！（※ムリじゃなかった!?）

第四章 我怎么可能成为阳角，不行不行！（※也不是不可能！？）

#

#球技大会当日。天気は良好。体調も健やかです！

球技大会当天。天气万里无云。身体也活力满满！

#ちなみに本日は、午前中は普通に授業があって、午後の授業を潰して球技大会が開かれることになっていた。なので大事を取って昼まで寝ていてもよかったんだけど、せっかく熱も下がったことだし！

顺带一提，今天上午还是正常上课，下午则取消了课程，改为开展球技大会。所以我也得以好好休息了整个上午，总算是退烧了！

#わたしはみんなに心配をかけた分だけ晴れ晴れとした笑みを浮かべながら、教室に入るなり元気よく挨拶をした。

我带着灿烂的笑容走进教室，用热情的问候回应大家对我的关心。

#「おはよ！」

「早！」

#「れなちん！」

“玲奈亲！”

#「おわっ」

“唔哇”

#香穂ちゃんがジャンプしながらわたしの両肩を摑んできた。バランスを崩して前のめりに倒れた際に、すかさず額に手を当てられる。

小香穗一下跳过来抓住我的肩膀。在我即将失去平衡向前倒下的时候，一只手趁机伸到了我的额头上。

#「熱は……ナシ！」

“发烧……退了！”

#「う、うん。治ったってば！」

“唔，嗯。都说过我好了啦！”

#「ちょっと信用ができなかったので」

“因为玲奈亲有点不可相信”

#「ええー!?」

“诶诶——！？”

#そんな、毎日誰よりも学校を休みたいと願っているわたしが、病上がりなのに学校に来たんだから、信じてほしい……。

为什么，尽管每天我都比任何人想要请假，但生病之后还是来上学了，希望你能相信我……。

#まあ、みんなのために無茶するかどうかで言ったら、それぐらいはしそうな感じもある……のかな。後先考えないからね。わかる。香穂ちゃんは正しかった。

#「心配かけてごめんねえ」

#「ほんとだよ。ま、来てくれたから許すケド！　球技大会までは大人しくしておくんだよ！　ほら、座ってて！」

#香穂ちゃんにムリヤリ、席に座らされる。

#でも、必要とされているのは正直、嬉しい……。へへへ……。

#「わかった、体力温存しておくね……」

#「ウン、ちょっとぐらいの用事があったら、代わりにやってあげるから休んでなさい」

#優しい……。

#「あ、でもその前にトイレに」

#「コラ、座ってなさい！　あたしが代わりに行っておいてあげるから」

#「それはどうやって!?」

#自分の分は自分で始末しなければならないので、トイレに向かう。その途中、平ひら野のさんと長は谷せ川がわさんがいたので、ちゃんと謝った。

#「すみません、熱出して皆様に心配をおかけして……。きょうはまったく問題ありませんので！　バスケ、がんばろうね！」

#そう言うと、ふたりもわたしを心配しつつ、きょうの大会へのやる気を燃やしてくれた。ふふふ、Ａ組の士気は高い！

#「あ」

#「……」

#女子トイレで手を洗っていると、この学校随ずい一いちの、黒髪の長身美人が現れた。

#「紗さ月つきさん」

#「具合、よくなったのね」

#「う、うん」

#紗月さんはわたしを上から下までじーっと眺める。な、なんでしょう。

#「きょうは、せいぜいがんばりなさいね」

#「は、はい！」

#「愛いとしの瀬せ名なのために、だものね」

#「ぐっ……そ、それはまあ、そうですけど……。紗月さんだって、紫陽花あじさいさんのためにって燃えていたくせに……！」

#紗月さんはツンとした澄まし顔。それがどうしたの？　とでも言いたげな不ふ遜そんっぷりに、わたしはそれ以上なにも言えなくなってしまう。

#一応、うちの最高戦力なので、このぐらいにしといてやりますか……ね！

#「ねえ、甘あま織おり」

#女子トイレを出ようとしたところで、呼び止められた。

#「なんですか？」

#紗月さんはトイレの中ほどで立ち止まっていた。他に誰もいないことを確認してからか、問いかけてくる。

#「あなたは、真ま唯いと瀬名と付き合って、幸せ？」

#「それは……どういった意味での」

#「勘ぐらなくていいわ。そのままの意味で受け取って頂ちよう戴だい」

#そんな、夜道で前から来た男が両手に手て斧おのを持っていて『自分は怪あやしいものじゃありません』って笑顔で言ってきたみたいなことを……。

#「裏の裏の裏まで勘ぐる癖くせがついてしまっているので、紗月さん相手には……」

#「面倒くさい女ね」

#「あれっ、紗月さん、こっちに鏡はありませんよ!?　そっちですそっち！」

#親切心で洗面所の鏡を指差すと、紗月さんから殺意のこもった視線をいただいた。あ、こっちで合っているみたいですね……。

#「そりゃ、まあ、幸せ、ですけど……」

#「ふうん」

#紗月さんはなぜか不機嫌そうだった。答えたのに！

#「あれだけ渋っていたくせに」

#「それは遡そ及きゆう処罰ですよ！」

#過去のわたしが考えていたことを、今のわたしが乗り越えていくのが、成長する人間ってもんじゃないかよう！

#むしろここで逆に、紗月さんに恋人がいかに素晴らしいかでマウントを取ってみようかな？　紗月さんにはわからないと思いますけどー！　って。一周回って面白いかもしれない。好奇心の対価は、自分の命で支払うことになるだろうけど……。

#「甘織」

#「はっ、はい!?」

#声が裏返る。

#しまった。紗月さんは人の心を読めるサトリの妖怪だった！

#いや、違うんですよ！　これは、つい思ってしまっただけで……！　思うぐらいは別に罪になりませんよね!?　だって人の心は自由であるべきですもんね!?

#じっと見つめられた後、紗月さんは興味を失った猫のように顔を背そむけた。

#「それは、よかったわね」

#「え？　あの、はい」

#素直に祝福してくれた……？　そんなわけがない。薄ら寒い気持ちになる。

#「だ、大丈夫ですよ、紗月さん！　恋人ができても、わたしたちは友達ですからね！」

#その言葉に返事はなく、紗月さんは個室に入っていった。

#……なんか、なんか、こう。

#指にささくれができたみたいに、普段は気にならないんだけど、ふとした拍ひよう子しに紗月さんの様子がおかしいな、って思うときがある。それは、メッセージをもらってから。あるいは、わたしが真ま唯いと紫陽花さんと付き合いだしてからだ。

#紗月さんの『言いたくないこと』ってなんなんだろう……。このささくれがいつまでも治らなかったらどうしよう。不安になる。

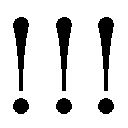
#球技大会が終わるまでは、わたしもいっぱいいっぱいだけど……。せめて、終わったらもう少し、紗月さんとしっかり話ができればいいな。

#「……ひょっとして紗月さん、真唯に恋人ができたから、自分と遊んでくれる時間が減って、寂さびしいのかな……？」

#「甘織」

#口に出していた迂う闊かつなわたしに、個室のドア越しに声がした。

#「バカが死んだら治るかどうか、実験してみる？」

#「いえ」

#わたしは疾風はやてのごとくきびすを返したのだった。

#

#教室前の廊下には、またも人だかりができあがっていた。

#うわ、なんかいつか見た光景……。

#わたしは嫌な予感を覚えながら、こっそりと中を覗のぞき込む。すると、そこにはゴジラとキングギドラがいた。もとい、真唯と高たか田ださんが向かい合っていた。

#あわわわわ。Ａ組とＢ組の頂点……。

#「まったくもって残念ですわ。今度こそあなたと決着をつけられると思いましたのに。でも仕方ありませんね。あなたのお仲間をコテンパンに叩きのめして、どちらが上かを知らしめて差し上げますわ！」

#相変わらず高笑いが似合いそうな芦あしケが谷や生徒ナンバーワンの高田さんが、ぐいぐいと迫ってくる。真唯はいつものように涼しく受け流すだけかと思いきや。

#「やれやれ……。いよいよ、君の言葉も聞き飽きたね」

#その剣けん呑のんな発言に。

#空気がピリッとした。

#「なんですって？」

#高田さんがわずかな微笑すらも引っ込めると。

#真唯もまた、瞳に怜れい悧りな色を宿して、口元をつり上げる。

#「私も、友達を傷つけられて、黙っているような女ではない、ということさ」

#ふたりの間に、嵐が吹き荒れている……！

#「ふ、ふんっ、どんなに言ったところで、5déesseゴツデイス の勝利は揺るぎませんわ！　あなたの悔しがる顔が今から楽しみですわね！」

#「果たして、それはどうだろうね」

#普段は決して柔にゆう和わな笑みを崩そうとしない真唯が、今度ばかりは不敵な態度で、高田さんに顔を近づける。

#うわっ、顔がいい女のムーブ……。Ａ組Ｂ組からも男女入り交じった『わあああ……！』という黄色い声が巻き起こった。高田さんですら、後ずさりする。

#ささやくように。だけども通りのいい声で真唯は宣告する。

#「勝利を得る者は、正道を征ゆく者だ。たゆまぬ努力となによりも真しん摯しな態度で臨のぞむべきだったんだよ。君のようなやり方では、私にも、私の友人にも敵かなうはずがない。それを教えてあげようじゃないか」

#「っ」

#高田さんが弾はじかれたように、真唯から距離を取る。

#そのお顔は屈辱のためか、赤く染まっていらっしゃいますわ！

#「それはだって、あなたが私のことを――」

#と、ヒステリックに言葉を区切って、高田さんはキッと真唯を睨にらみつける。

#「――いいですわ！　どちらにせよ、結果はすぐにわかりますもの！　首を洗って待っていることですわ！　王おう塚づか真唯！」

#高田さんがバラの花びらを散らすように片手を掲かかげると、真唯が獰どう猛もうな笑みを浮かべる。

#「君こそ、せっかくのきれいな長い髪が、汚れてしまうのが残念だ」

#「……なんの話です？」

#怒り半分、怪け訝げん半分の高田さんに、真唯が言い放つ。

#「負けて申し訳ないと、Ｂ組の皆に深々と頭を下げることになるからね」

#「――――」

#そのときの高田さんの様子を見ていた人々は、後にこう語る。ええ、ええ、石油コンビナートが大爆発するみたいでしたよ、と……。

#高田さんがひとしきり喚わめき散らしていたところで、ホームルームのチャイムが鳴った。

#鬼の形ぎよう相そうで去っていった高田さんを見送った後、輪の中から香穂ちゃんが飛び出してくる。

#「すっごいマイマイ！　言うじゃん！　初めて見た！」

#その言葉を皮切りに、Ａ組の男子も女子も「ちょっとスッキリした！」「王塚さん、かっこよかったよ！」「あとは勝つだけだな！」「格ではかんっぜんに勝ってたけどね！」と口々に言って、盛り上がってゆく。

#男子が「みんなで瀬名さんの仇かたき、取ろう！」と拳を突き上げると、輪の端っこにいた紫陽花さんが「生きてるよ～！」と声をあげて、笑いが巻き起こる。

#紫陽花さんと目が合った。わたしは大きくうなずく。

#クラスよりわたしを選ぶと、紫陽花さんは言ってくれた。それはすごく嬉しかったけど……でもやっぱり、紫陽花さんはこうしてみんなに愛されている姿がよく似合うから。これでよかったんだ。

#紫陽花さんが可か憐れんに微笑む。口元に手を添えて、唇だけで『ふぁいと』と応援してくれた。かわいい！

#ほんっと学校に来れてよかった！

#そして――。

#「れな子」

#「わ、わわわ！」

#真唯に見つかったわたしが、輪の中心に引っ張り込まれる。

#「というわけだ、頼りにしているよ」

#まるで社交ダンスのように手を取られ、真唯の微笑みに照らされて。

#クラスメイトたちの視線が突き刺さる。

#目立ちたくない！　目立ちたくない――けど！

#ステージ上でコスプレしてぴょんぴょん言ってたのを、大勢から見物されるよりは、だいぶマシ！　みんなに振り向く。

#「ま、任せて！」

#わたしはぐっと拳を握って、大した言葉なんて思いつかなかったけど、とにかく威勢のいいことを大きな声で言った！

#「この甘あま織おりれな子が、一年Ａ組を、大勝利に導きますから！」

#わっと歓声があがる。

#今まで真唯グループに所属して、スクールカースト最上位だワーイ！　なんて浮かれてたわたしだったけど……。なんか、ようやく実感した気がする。

#みんながわたしの話を聞いてくれて、わたしの一言でみんなが沸き上がって、わたしの一挙一動がクラスに影響を与える。これが陽キャ……！　学校最強の存在……！

#それではお借りした女王の権威に傷がつかないよう、せいぜいジタバタしますかね！

#

#＊＊＊

#

#なんて息巻いた、お昼休み。

#我ながら感情の起伏が激しすぎて、オーバーフローしちゃわないか心配なんだけど……わたしは人ひと気けのない校舎裏で、震えながらひとり待っていた。

#気がついたら何者かによって、机の中に怪文書が入れられていたのだ。

#その手紙はわたしの手の中にある。

#いったい、なにをしたっていうんだ、わたしが……。ただ学園の女王のおそばで、甘い汁を吸わせてもらっているだけなのに……！

#罪状十分すぎるわたしの前に現れたのは、意外な人物だった。

#「お待たせして、ごめんね」

#「あ、あなたは！」

#高田さんのお友達。紫陽花さんにちょっぴりキャラ被かぶっている、羽は賀が鈴すず蘭らんさんだった。

#「よく来てくれたね」

#「そりゃ来ますよ！　来るしかないじゃないですか！　こんな手紙を送られたら！」

#わたしは手紙を突き出した。

#その文面にはこうあった。

#『甘織れな子。

#私はお前の重大な秘密を握っている。

#バラされたくなければ、お昼休みに独りで校舎裏に来るべし。』と。

#「なにを知っているっていうんですか、羽賀さん……」

#全身をこわばらせる。あらかじめ紗月母にスタンガンを借りてくれば良かった。

#すると、羽賀さんは次の瞬間、大きく頭を下げた。

#「ごめんっ！」

#「…………な、なにがですか？」

#恐る恐る恐るぐらいの気持ちで問いかける。

#「あのね、その文面、ぜんぶウソなの」

#「…………う、ウソ？」

#「うん」

#「いや、でも重大な秘密を握っている、って書いてますけど……」

#「甘織さんだって目立つ陽キャなんだから、重大な秘密のひとつやふたつぐらいあるでしょ」

#「それはどういう偏見ですか!?」

#思わず叫ぶ。

#「いるかもしれないじゃないですか、秘密のない陽キャだって……」

#特に誰とかは、思いつかないけれど……。

#「っていうことは、甘織さんにはあるんだ？」

#しまった！　罠わなだった！

#「黙秘権を行使します……」

#わたしに秘密があることは明白で、むしろもしかしたら、芦ケ谷でわたしがいちばん秘密の多い女かもしれない、まである。

#中学時代陰キャだったこと。紗月さんとキスしたことがある。先日コスプレフェスに出た。真唯と付き合っている。紫陽花さんとも付き合っている……。どれかひとつが漏もれただけでも、余裕で致命傷だ。

#「あ、大丈夫だよ。テストの点数が悪くて親に見せてないとか、スマホゲーに課金しちゃったとか、夜中にチョコ食べすぎちゃったとか、そういうの誰にだってあるから！」

#「そうですね！　安心しました！」

#羽賀さんに余計に傷口を広げられて、それよりも、と問う。

#「では、わたしになんのご用で……ハッ」

#わたしは周囲を見回す。まさか、いつぞやの紗月さんのときみたいに、今度はまんまとおびき寄せられたわたしが袋叩きにされる……!?

#ムリだよ、あれは紗月さんだったから耐えられたんだ！　わたしは長女だけど紗月さんじゃないから耐えられない！

#「ち、違うの、そんなに警戒しないで！」

#警戒するなと言われて、ハイワカリマシタと納得できるわけもなく！

#「あのね、ひみちゃんの話なの」

#「ひみちゃん……やっぱり、高田卑ひ弥み呼こさんの話じゃないですか！」

#「そうだけど、そうじゃなくて！　甘織さんにお願いしたいことがあって」

#またしても、羽賀さんは大きく頭を下げた。

#「ごめん、あのね、無茶なお願いだってのは、わかってるの……。だけど、他に方法がなくて、ごめん」

#「な、なんですか……？」

#その切せつ羽ぱ詰つまった声は、さっきのお手紙みたいな偽にせ物ものには思えなくて、なんだか聞いてあげなきゃ可哀想、という気持ちにさせられてしまう。

#事実、顔をあげた羽賀さんは、わたしと目を合わせられずに、ぼそぼそと口を開く。

#そのお願いというのは、あまりにも予想外な内容だった。

#「甘織さん、お願い……。ひみちゃんのために、球技大会で手を抜いてほしいの」

#わたしはＢ組の、ほとんど知らない、絡からんだこともない、どちらかというと迷惑をかけられっぱなしのグループの子から、とんでもないこと言われて。

#「……は？」

#それって、つまり……？

#「わざと負けろ、ってこと……？」

#羽賀さんは、しばらくして、小さくこくりとうなずいた。

#めちゃめちゃ素すで、わたしがうめく。

#「いや、ムリですけど……」

#そんなお願い、ぜったいムリに決まっている。

#紗月さんが『私とも付き合って』って言ってきたときとは比べものにならないほど、わたしは強い拒否感を覚えていた。

#そこまでして、簡単に勝ちたいんですか……？　だから、グループでいちばん弱そうなわたしを狙ってきたんですか……。

#ドン引きしているわたしに、羽賀さんが首を横に振る。

#「だって、もしも、ひみちゃんが負けちゃったら……そんなの、ぜったいだめだから……」

#「……え？」

#羽賀さんが、潰つぶれた風船から空気が抜けるように、言う。

#「ひみちゃん、この勝負に命懸かけてるの！」

#「ど、どういうことですか」

#負けたら死ぬ……？　そんな、わたしの知らないところでデスゲーム的な展開が……？　いや、怖すぎなんですが！

#羽賀さんが、とつとつと事情を話してくる。

#「ひみちゃんね、球技大会の話が出る前から、ずっとＡ組の王塚さんを敵視していて。確かに学校の話題とかぜんぶあの人が独占しちゃうから、ボケカスクソうっといなーってよく話してたんだけど」

#流れるように口悪いな、この人……。

#「なんか執着が尋じん常じようじゃないっていうか、だんだんおかしいなって思ったから、聞いてみたんだ。そしたら、ひみちゃんって昔はモデルをやっていたみたいで」

#「えっ……!?」

#「あ、これぜったい誰にも言わないでね！　昔の記事とか引っ張り出されたら、さすがに恥ずかしいと思うから」

#確かに、高田さん背高いもんな……。にしても、ひとつの学校にモデルってそんなにいるんだ。東京ってすごい。

#「でもね、ひみちゃんの載のっていた雑誌が、ある日、王塚真唯の特集を組んだら、その売り上げがよかったからって……ひみちゃん、その雑誌から外されて……。他にも何個も、王塚さんに仕事を奪われたとかで……。ひみちゃん、プライド高いから、それでモデルを辞やめちゃったんだって」

#……。

#「なのに、学校でまで自分より目立っているのが許せなくて、せめて学校ぐらいでは勝ちたいって、ひみちゃん、本気なの。このままじゃ王塚さんに、居場所ぜんぶ取られちゃうよ」

#命かけてるって、そういう意味か……。

#同世代のモデルは、少なからず誰もが真唯に影響を受けているんだろう。高田さんみたいな人は、いっぱいいそうだ。

#なんとなく、花はな取とりさんから見せてもらった映像を思い出す。真唯と紗月さん、そしてその後ろにいた、その他大勢の子どものモデルたち……。

#……でも。

#「そんなの、逆恨みじゃん……」

#「そうだけど！　それでも、王塚さんに勝てたら、これからのひみちゃんは、きっと変われると思うんだ。お願い、甘織さん」

#羽賀さんが一生懸命、わたしを見つめてくる。

#「お願い、瀬名さんにしたことだったら、あとでちゃんと謝るから……。だから、お願い。私たちに手を貸して、甘織さん」

#そんなの……。

#「なんて言われても、わたしには、ムリです……！　すみません！」

#「甘織さん！」

#わたしはいたたまれなくなって、羽賀さんの視線から逃げるようにして、その場を去った。

#いくら友達のためだからって、そんなやり方、ずるい。

#人の善意につけ込む暇ひまがあるなら、もっともっと練習すればよかったじゃん！　してたのかもしれないけど……！

#どんなに言われても、八や百お長ちように手を貸すなんて、ムリだから！

#そしてわたしは、羽賀さんを振り切った先で。

#

#「お願い、甘織さん」

#次の人に捕まっていた。

#前髪を長く伸ばして、あまり表情の見えない亀かめ崎さき千ち鶴づるさんが、90度のお辞儀をしている。羽賀さんのときと同じだ。

#「な、なんですか……まさか、球技大会でわざと負けろって言うんじゃないでしょうね……」

#わたしと亀崎さんが、一対一。人ひと気けのない渡り廊下で、亀崎さんがびっくりした後に、真剣な顔でうなずいた。

#「……その、まさか。私ね、あんなに不安そうにしている卑弥呼を見るの、初めてだったの」

#聞きたくもない事情を、亀崎さんは勝手に話し始める。

#「どんなときにも自信満々だったのに……。珍しくね、卑弥呼が弱音を吐いたの。もう後には引けなくなった以上、勝つしかない。もし自分が負けたら、なにもかもを失ってしまう。これからの学校生活、やっていけなくなる、って」

#後には引けなくなった、っていうのは、紫陽花さんのペンケースを落としたことだろうか。

#確かにあれで、Ａ組とＢ組の対決は、冗談ではなくなってしまった。

#高田さんはめちゃめちゃヒールになって、Ａ組の結束は高まった。

#だけど……それもこれもぜんぶ、高田さんが蒔まいた種じゃん……。

#「卑弥呼はね、昔っからすぐ調子に乗って、思い込みで突っ走ろうとして、勝手に傷ついちゃって……。本当に危なっかしくて、見てられないの。ほんとにバカ。だけど、今回の一件だけは、いつもとぜんぜん違ってて……」

#そんなの……。

#知らないキャラの設定だけを語られている気分だった。

#わたしが知っている高田さんは、真唯に突っかかっている姿だけ。その裏にこんなにたくさんのストーリーがあったんですよ！　って、いくら語られたところで……。

#そっちのお話に、わたしを巻き込まないでほしい。

#それとも……これが『目立つ』ってことなんだろうか。

#「甘織さん、お願いします。悪いことしてるって、わかってる。だけど、今はもう、これしか方法がなくて……。私がこんなことしてるって知られたら、卑弥呼には怒られてしまうでしょうけど……。どうか、お願いします」

#頭を下げた亀崎さんの前で、わたしは固まっていた。

#なんで羽賀さんも、亀崎さんも、よりにもよってわたしにこんな風に訴えてくるのか。その理由が、不意にわかった気がする。

#陽キャの人生には『物語』がある。

#それは王塚真唯を例にあげれば、わかりやすい。

#真唯は、友達になってくれてわたしを救ったし、紗月さんのライバルとして君臨しているし、高田さんを含めた学校全体を巻き込んで、自分の物語を作り上げている。

#それはただ普通に、真唯が真唯らしく生きているだけなのに、だ。

#わたしが高校でも陰キャのままで、もし真唯とひょんなことから知り合って、例えば放課後の図書館で笑顔を向けられて、ふたつ三つ言葉をかけられて優しくされただけで……きっと、高校を卒業してからも、それはわたしの大切な思い出になっただろう。

#それが真唯の物語性。陽キャだからこその、輝くような存在感だ。

#真唯だけじゃない。紗月さんだって、紫陽花さんだって、香穂ちゃんだって、今も誰かに影響を与え続けている。

#そして、あるいはそれは――。

#高田さんが紫陽花さんのペンケースを落っことして、わたしが血けつ気きに逸はやって宣戦布告をしたそのときから――わたしもそんな存在に、片足を突っ込んでしまったのかもしれない。

#そう思って、怖くなった。

#「ごめん、そういうの、ムリだから……わたし……！」

#「あっ、甘織さん！」

#わたしは亀崎さんの訴えを拒絶した。

#誰かに影響を及ぼすというのは、いいことだけじゃない。

#こんな風に、無理難題を言われて、それを蹴っ飛ばしたら逆恨みされて……。理り不ふ尽じんだ。でも、そんな理不尽なことに巻き込まれて、真唯はきっと何度だって傷つけられてきたんだ。

#有名税なんて言葉、今まではなんとも思っていなかったけど……。目立つっていうのは、きっと誰かの物語の登場人物に招かれて、勝手に役割を押しつけられるってことで。

#わたしは走って逃げ出す。

#陽キャであるというのは、特権ではなく、責任なんだ。

#だけどわたしは、そんなに多くの人とは関われない。

#コミュ力は簡単に底をつくし、メンタルポイントの回復はあまりにも遅い。能力がないのに立場だけ持ち上げられても、わたしにできることはなんにもない。

#高田さんのためにって言う、羽賀さんや亀崎さんの思いをぶつけられても。

#わたしは彼女たちを責めたり、あるいはさとしたりもできなくて。ただ壁を作って、逃亡するだけだった。

#荒い息をついて。呼吸を整えるわたしの背に、声がかけられた。

#「ねえ、甘織さん！　ちょっと、今いいかな！」

#振り返る。

#香穂ちゃんとキャラがかぶっている謎のギャル、根ね本もとミキさんがそこに両手を合わせて、申し訳なさそうな顔をして、立っていた。

#もう、勘弁して……。

#

#＊＊＊

#

#声がする。

#「れなちん！」

#「え？」

#顔をあげる。そこには眉根を寄せた香穂ちゃんがいた。

#「大丈夫!?　ぼーっとしちゃって……。やっぱり、まだ熱あるんじゃないの？」

#「いや、そんなことは」

#わたしは着替えて、体育館にいた。周りには同じように着替えた女の子たち。香穂ちゃんはバスケのユニフォームをわたしに突き出して、唇を尖とがらせる。

#「もう、しっかりしてよね。いよいよ本番なんだからさ！」

#「う、うん、ごめん。ちょっと、緊張しているのかも」

#体操着の上からユニフォームを着る。番号は４番。なんかこれいい番号だった気がする。

#「がんばりましょうね、甘織さん！」

#「私、これを高校生活最高の思い出にしますね……！」

#平野さんと長谷川さんも、声をかけてくれる。わたしが慌あわてて作り笑顔でうなずくと。

#髪を後ろにくくった紗月さんが、首を傾かしげた。

#「なにかあった？」

#「え？　いや、そんな別に」

#「そう」

#グラウンドでは男子がフットサルを、女子がソフトボールを。そして、体育館では男子がバレーを、女子がバスケを行うことになっている。

#隣のコートでは、Ａ組の男子が円陣を組んで、燃えている。やる気満々だ。

#グラウンドからワーッという歓声があがった。どっちかはわかんないけど、試合が始まったんだろう。その声で、ようやくわたしの視界も広がった。

#一年生はＤ組まであるんだけど、うちの学校はリーグ戦でもトーナメント戦でもなく、シンプルにＡ組対Ｂ組。Ｃ組対Ｄ組という組み合わせになっている。だからバスケも一試合だけ。

#「マイマイやアーちゃんみたいに、あたしたちもがんばらないとね！」

#そうだ、さっきまで先に始まったソフトボールの試合を応援していたんだ。

#Ｂ組はソフトボール部が多いらしく、なかなかの打線を揃そろえているみたいだけど、それをピッチャーの真唯が次々と三振に打ち取っていった。

#真唯はまさにスター選手の輝きを放ち、そのたびに男子も女子も一緒になってキャーキャー騒いでいた。

#何回まで見学していたのかは忘れてたけど……。でも、Ｃ組対Ｄ組のバスケが終わったから、わたしたちがこうして呼び出されたんだ。

#体育館には、まだ熱気が渦巻いている気がした。

#そして、わたしたちの前には。

#「いよいよ勝負ですわね。クインテット」

#高田さんを含めた、Ｂ組の五人が勢ぞろいしている。

#「フフーン！　けっちょんけっちょんにしてやるんだからネ！」

#中央に立った香穂ちゃんが、びしっと指先を突きつける。

#バチバチと火花が飛び散るさまを見て、応援の男子が「おおー……」と、どよめいていた。

#相手は、高田卑弥呼さん、羽賀鈴蘭さん、亀崎千鶴さん、根本ミキさん、そして。

#「どうも、よろしくお願いします」

#最後のひとりは、なんかめっちゃ背の高いスポーツマンっぽい強そうな女子だった。

#「あれ!?　耀よう子こちゃんじゃない!?」

#燿子ちゃんは体育館の二階の細い通路にいた。おーい、と大きく手を振られる。

#「みんなー！　がんばってねー！」

#「なんで!?　5déesse で一チーム組んでいるんじゃないの!?」

#わたしが叫ぶ。

#「あははっ、わたし、運動あんまり得意じゃなくてー！」

#「ずるい！　ずるいー！」

#さらに香穂ちゃんまでも叫ぶ。

#「げっ、バスケ部の一年生エース連れてきてんじゃん！」

#「彼女はきょうだけ 5déesse よ」

#高田さんがしれっと、とんでもないことを言い放つ。エースさんは『嫌だなあ』という顔をしていた。

#「大丈夫ですよ！　こっちにも元バスケ部の実力者いますもんね！　ね、甘織さん！」

#「え!?」

#平野さんの言葉に激しく動揺する。

#でも、試合前にみんなの士気を下げる発言をするわけにはいかないし！

#「そ、そうだね！　わたしに任せて！　あとなるべく紗月さんにボールを集めよう」

#「はい！」

#「別にいいけど」

#こうして、まとまりがあるんだかないんだかわからない状態で、わたしたちは整列する。

#うっ……羽賀さんと、亀崎さんと、根本さんが、なにかを訴えかけるように、ちらちらとわたしを見てる気がする……。

#さっきまでの話を一生懸命、頭から追い出す。

#Ｂ組の人たちの話を聞いた後だと、高田さんはチームメイトに気を遣つかって「ぜったい勝てるわ！」「どんなに点数を取られても、取り返すもの！」「みんな、緊張せずにね」と、周りをちゃんと励ましているようだった。

#もしかして本当に、ただの悪い人ではないのかもしれない……なんて思っちゃうと、向こうの思うつぼなんだ！

#もしかしたらわたしを精神的に揺さぶる作戦だったとか……？　さすがにそれはないとしても、結果的にそうなっているじゃん！

#だめだめ、だめだめ。今は試合のことだけ考えて。

#香穂ちゃんやみんなと練習した日々を、無駄にはさせないんだから。

#審判役の先生が、ボールを持ってコートの真ん中に立つ。最初はジャンプボールからだ。

#センターサークルに立つのは、向こうは当然、高田さん。そしてこっちは。

#「よし、れなちん行け！」

#「ええっ!?」

#香穂ちゃんに送り出される。

#「高田さんと身長20センチぐらい違うんですけど！」

#「れなちんがリーダーでショ！」

#「そうだったのか……」

#いつの間に……。ならば、わたしはリーダーとして采さい配はいを振る。

#「お願いします、紗月さん！」

#「いいけど」

#よし、わたしは満足げに額ひたいの汗を拭ぬぐう。リーダーとしての責任を果たしてしまったな。隣の香穂ちゃんが『それでいいのか？』という目をしてたけど、リーダーとしてスルーした。

#いよいよ試合が始まる。

#大丈夫大丈夫。香穂ちゃんも、紗月さんもついている。敵に回すととんでもないお方がただけど、味方にしたら、頼りになる人たちだ。

#わたしもがんばって……紗月さんをサポートしますので！

#

#ジャンプボールはなんと紗月さんが取った。

#「むう！」

#高田さんが悔しげにうなる。

#こぼれたボールを拾ったのは香穂ちゃん。

#「ごぅごぅ！」

#カットに来た根本さんを素早く振り切る。わたしもパスを受けようと、ゴール近くに移動するけど――。

#わたしのマークについたのは、バスケ部のエースの人だった。なんで!?

#「ちょ、あの」

#圧力が強すぎる。抜ける気がしない！

#まごまごしているうちに、香穂ちゃんが平野さんにパスをして、それがさらに紗月さんの手に渡って――。

#紗月さんがひょいとジャンプショット。「あっ!?」とＢ組の誰かが叫んだ。

#ボールは安定感のある放物線を描いて、ゴールネットを通過する。最高点の高い、女子バスケのお手本のようなツーハンドシュートだった。

#「さっすがサーちゃん！　仕事のデキる女ー！」

#香穂ちゃんがぺしぺしと紗月さんの背中を叩く。

#「は、はわわわ……私のパスが、琴ことさんに渡って、琴さんがシュートしてくださった……！」

#「こんなのもう、共同作業じゃないですか……！」

#感かん極きわまったように平野さんと長谷川さんが声をあげる。

#ふっふっふ、これが真のクインテットの力……。この調子ですよ、紗月さん！

#向こうは悔しそうにしていた。

#「やはり強敵……！　だけど、わかっていたこと！　取られた分はきっちり取り返しますわよ、皆さま！」

#高田さんが号令をかけて、今度はこっちが守る番。

#わたしもみんなに、告げる。

#「よっし、例の作戦でいこう！」

#「……例の作戦？」

#向こうチームが眉をひそめる中、わたしたちは一致団結してディフェンスに当たる。

#これぞ妹から賜たまわった作戦。

#――全員で守る、だ！

#球技大会の即席チームは、全員がほぼ素人しろうとだし、チーム練習なんてろくにしてこなかった以上、綿密な連係を取るなんてムリ。

#だったらどうするか。

#『相手のゴール成功率を下げて、こっちのゴール成功率をあげればいいんだよ』

#わたしのお部屋で、妹が友達から教わったお話を伝授してくれた。

#『マークがついた状態で、素人のスリーポイントシュートなんて、ほとんど決まらないんだから。外は完全に捨てるの。それで入ったら、切り替えて。入らなかったボールを全員で獲とる。そうすれば、こっちの攻撃機会は増えて、あっちは自滅してくってわけ』

#完全に、素人対素人の対戦における必勝法だった。

#『まあ、そのためにはこっちもシュートが決まらないといけないんだけどね』

#だからわたしは、ずっとシュートの練習ばっかりしてきた。

#相手のパスコースを塞ふさいだり、ディフェンスやドリブルの技術を磨くのは、難しいから！

#全員で守って、外へのパスは素通し。そして、オフェンスにおけるシュートは失敗しないようにして、攻撃機会を奪い続ける。

#これがＡ組の作戦だ！

#事実、ボールをもって切り込んでこようとした鈴蘭さんは、香穂ちゃんと平野さんのディフェンスに苦戦していた。

#前へのパスは封じられているため、フリーになっていた亀崎さんにボールを回す。

#わたしも、必要以上に前へは出ないで、内側にいた高田さんとの間に体を割り込ませている。

#困った亀崎さんは様子を窺うかがいながら、その場からシュートを打って――。

#――外した！

#そのボールを、ちょうどいい位置にいた紗月さんが奪い取る。高く跳ぶのが似合う女ぁ！

#今度はわたしたちの攻撃だ。すでに走っていた香穂ちゃんにパスが渡る。

#「でいやあ！」

#香穂ちゃんが叫んでシュートしようとして、そしてわたしにパスしてきた。ひえ。

#仲間のフェイントにわたしまで引っかかりそうになるけど、今度は落ち着いて、シュートを、シュートを……。

#よし、入った！

#「４対０！」

#香穂ちゃんがわたしにハイタッチをする。やったー！

#妹が与えてくれた作戦は、見事に決まった。これを続けていけば勝てる。きっと勝てる。

#「甘織さん、ワンハンドシュートかっこいいっ……！」

#「クインテットが繫いだボールの絆きずな……ああ、神……！　私は今、歴史の生き証人になっている……！」

#平野さんや長谷川さんにも親指を立てて、にっこりと笑う。

#ああ、まさかわたしが体育の時間に活躍できているなんて、信じられない。まあ、やったことは定位置について、シュートを入れただけなんだけどね！

#妹の注意が頭に浮かぶ。

#『でも、この作戦の難は、オフェンスにもディフェンスにも参加しなきゃいけなくて、スタミナの消費が激しいから、基礎体力しっかりつけてね』

#もしこれが40分の試合ならきっとムリだった。

#けど、球技大会の試合時間は、前半10分、インターバルを挟んで後半10分と、普通のバスケの試合の半分の時間だから。

#「最後まで、この調子でがんばろう！」

#順調な滑り出しであった。

#妹は言った。『チームがみんなモチベ高くて、自分が目立つためにとか無茶なことをせず、作戦を守ってチームプレイを第一に心がけてたら、球技大会は楽勝だよ』と。

#あるいはそれは、本当にそうなのかもしれない。

#みんなが学校行事だから、と手を抜くようなただの球技大会だったら、あるいは。

#Ｂ組も本気だった。もしかしたら、わたしたち以上に。

#これは、そういう結果なのだった。

#

#12対15。

#第一クオーターも終わり間ま際ぎわ、なんと点数は逆転されていた。

#全員で守ろう作戦は、途中まで順調だった。なのだけど……。唯ゆい一いつの誤算は、バスケ部の助っ人の存在だった。

#わたしたちの作戦に気づいた高田さんの指示により、彼女が外からスリーポイントシュートを狙ってきたのだ。さすがちゃんとしたバスケ部の人だけあって、完全フリーから放たれるシュートは、まさに射程距離内の凄すご腕うでスナイパー同然。

#百発百中ではないにしても、無視できるレベルじゃなかった。

#だから、うちで二番目に上手な香穂ちゃんが、エースさんをマークしたんだけど……そうしたら今度は高田さんを止められる人がいなくなってしまう。

#相手が２トップなのに、うちでずば抜けて上手なのは紗月さんだけ。その紗月さんも、厳しいマークを食らって、思うように点数を入れられなくなっていた。

#みんな、がんばって練習をしたから、大きなミスはしていない。だけど、急にものすごく上手になったりもしないのだ。

#紗月さんがレイアップシュートを入れて、１点差に戻したその矢先。

#「ここで決めて、突き放すわよ」

#高田さんがエースさんとパス回しをして、どちらが来るのかわからない状態。紗月さんは相手にボールを取られないよう、リバウンドのためにゴール下にいなきゃいけないし。もうこうなったら、わたしが高田さんを止めるしかない……！

#「甘織さん、来ましたわね」

#「ま、負けないんだから、Ａ組は」

#「残念ながら」

#パスを受け取った高田さんが、わたしを睨みつける。その目力にわたしは気け圧おされる。

#高田さんは命を懸けている。羽賀さんはそう言っていた。わたしを睨むその視線の先に、執念のようなものを感じてしまう。

#ドリブルのリズムが変わる。

#来る――。

#「――あなたでは、役者不足ですわ」

#「な」

#わかっていたのに、止められなかった。いともたやすく、高田さんはわたしを抜き去る。

#そのままジャンプシュートブルアツプジヤンパー。ボールがネットを揺らす。

#最後に２点を入れられて、前半戦のスコアは14対17。

#２分のインターバルを挟んで、決着の後半戦へと持ち越された。

#

#「ごめん……」

#わたしはみんなに頭を下げた。

#タオルで流れる汗を拭った紗月さんが、ふー、とため息をついて、一言。

#「どれのこと？」

#「うっ」

#最後に高田さんを止められなかっただけじゃなくて、シュートを外したり、パスをカットされたり……それなりに醜しゆう態たいをさらしちゃったけど……！

#紗月さんがおもむろにわたしの額に、手を当ててきた。

#「へっ!?」

#「……まだ熱があるってわけじゃないのね」

#び、びっくりした。

#「なんでですか……？」

#「試合に集中できていないように見えたから」

#それは……。紗月さんから目を逸らすと、その先で香穂ちゃんが腕組みをしていた。

#「メチャメチャ集中してても、れなちんはこんなもんだよ！」

#「それもそうね」

#なんてフォローだ。でも、フォローありがとう、香穂ちゃん……。

#「それよりも、後半戦どーしようにゃあ。作戦はそのままに、あとは気合いでなんとか逆転する！　トカ？」

#「無能すぎないかしら」

#「じゃあサーちゃんにはなにかいい案があるっていうんですかー!?」

#「そのことを話し合う時間でしょう」

#「確かに……！」

#香穂ちゃんは衝撃を受けたようにのけぞった。漫才みたいなやりとりに、その場の雰囲気が少しだけ和なごんだ気がする。

#「でもそれじゃあ、どーしようねえ」

#だけど、肝心のことは決まらないまま、時間だけが過ぎていく。

#わたしはそこで、平野さんがちらちらと視線を上げ下げしているのに気づいた。ハッ、これは陰キャ特有の、どのタイミングで話に交ざればいいかタイミングを窺っている仕草……！

#「平野さん、なにかあったりする？」

#「えっ!?　あ……あ、あの……！」

#話を振ると、みんなの視線が平野さんに集中した。ハッ、申し訳ないことをした……!?

#平野さんはぐるぐる目になって、それでも口を開いてくれた。

#「み、みんなで守るの次は、みんなで攻めるのはどうでしょうか！」

#言ってしまった……！　と平野さんが固く目をつむる。

#発言した後の間まが、なによりも怖いというその気持ち、非常によくわかります。だからわたしも、すぐに『あーなんでもないですなんでもないですそんなのだめですよねー！』とか、発言の後に付け加えちゃうんですよね。

#平野さんは手をパタパタ振って。

#「あ、いや、なんでもないです、なんでもないです！　そんなのだめですよねー！」

#わたしの心の声とまったく同じことを言う平野さんに、長谷川さんが大きくうなずいた。

#「いいかも……！　ね、どうですか！」

#「そうね」

#紗月さんが思し案あん顔がお。

#「現状の問題点を挙げると、相手のオフェンスを止められないことよね」

#「そ、そうです。だから、全員で守っても守り切れなくて、点差が開いていっているのかなって……。あっ、役に立っていない私が生意気なことを言ってスミマセン……」

#平謝りする平野さんの言葉を、香穂ちゃんが引き継ぐ。

#「だったらディフェンスを捨てて、点取り合戦を挑むってわけかあ！　ひらのん大胆だね！」

#「ひ、ひらのん……？」

#目をぱちくりさせる平野さんの視線が、黙っていたわたしのほうに向く。

#「うん」

#わたしは平野さんのほうを向いて、努つとめて明るい声をあげた。

#「いいと思う！」

#「いや、でも」

#「どっちみちこのまま続けていっても、負けちゃうかもしれないし！　だったらやってみようよ！　なんにもしないで負けるほうがやだな、わたしは！」

#わたしの言葉に、香穂ちゃんが「おう！」と拳を突き上げ、紗月さんが「そうね」と首しゆ肯こうした。平野さんはしばらく、どうしよって顔をしてたけど、目が合った長谷川さんが背中を押すようにうなずいた。

#「じゃあ具体的にどうするか、決めないとだね」

#「う、うん……うん！」

#クインテットに意見するなんて、わたしが同じ立場だったらぜったいできなかっただろうから、平野さんはすごいな。特にあれだけ畏い敬けいの念を抱いていた紗月さん相手に……。

#でも、言ってたもんね。クインテットのことが大好きだ、って。だったらちゃんと平野さんの作戦で勝って、いい思い出にしてあげたい。

#集中しなくっちゃ、わたしも……！

#ただ、見つめた先。Ｂ組の五人もがんばってこのリードを守り切ろうと一生懸命、お互いを励まし合っていた。

#わたしたちＡ組と、高田さんたちＢ組。

#仲が良くて、この日のために練習を重ねて、絶対に負けられないんだって強いモチベーションをもっていて……。

#そこにいったいどんな違いがあるのか。わたしには、わからないままだった。

#

#そういえば、紫陽花さんに言われたことがある。わたしは誰にでも優しい、って。

#あれを言ってくれたのは紗月さんだったかな。わたしは陰キャで気を遣うから、どんな人の弱さにも寄り添える、みたいなことを。

#その言葉を聞いたときにはあんまりピンとこなかったんだけど……。こうして勝負をしているとわかる。

#このコートに立つ生徒の中で、幸せになれるのは、たった五人だけ。

#残る五人は、敗北の悲しみに浸ひたることになる。

#戦っている最中なのに、負けるほうに感情移入するなんて、さすがにバカすぎる。

#いつもやっているような、顔の見えないネットでのオンライン対戦なら、こんな風には思わなかった。

#相手側の事情なんて、ほんとに、知らないほうがよかった。

#わたしは優しくなんてない。ただ、愚かなだけだ。

#

#後半戦が始まり、辺りにはギャラリーが増えてきた。

#この一戦は、高田さんがさんざん焚たきつけてきたこともあって、芦ケ谷一年生の間で注目の的まとになっていたようだ。他のクラスからも、大勢見物人がやってきている。まあ、そうでなくても香穂ちゃんや紗月さんがバスケをしている姿は、眼がん福ぷくだからね……。

#これだけ多くの人に見られながらなんて、衆しゆう目もく耐性０のままだったら、わたしはドリブルすらもうまくできなくなっていただろう。ありがとうリナぴょん。

#作戦内容としては、平野さんと長谷川さんでゴール下だけは死守しつつ、他の三人はディフェンスで使うスタミナをなるべく減らして、攻撃に全力を注ぐ戦法。

#案の定、相手のゴールはなかなか止められないけど、それは想定内。むしろしっかりとカウンターを決めることで、試合はスコア勝負の様相を呈してきた。

#16対17。16対19。18対19。18対21。20対21。

#なかなか追いつけないけれど、かといって突き放されもしない。

#わたしたちはなんとか食らいついていた。

#「……なかなかしぶといですこと」

#「うん……こっちは、助っ人までお願いしているのに」

#思うように点差を開けなくて、高田さんと羽賀さんにも、疲労の色が見える。

#「さすがはクインテット。そうでなければ、面白くはありませんわね」

#内心はともかく、あくまでも高田さんは自信満々に胸を張る。それが上に立つものの役割とばかりに。

#ただ、向こうが疲れているということは、こっちだって同じだ。

#「あ、あの、小こ柳やなぎさん」

#「はぁ、はぁ……なーに？」

#「いえ……あの、大丈夫ですか……？」

#「ま、なんとかなる、デショ！　鍛えてるかんね！」

#平野さんに心配された香穂ちゃんが、空から元気を振り絞ってピースサインをする。

#実際、うちでいちばん疲れているのは、香穂ちゃんだった。攻守の要かなめである高田さんをずっとマークして、マークされているんだ。負担が激しすぎる。

#たった20分の勝負だけど、その間ずっと全力疾走しているようなものだから。

#かといって、紗月さんと香穂ちゃんが替わったら、リバウンドが取れなくなる。

#「ねえ、香穂ちゃん……わたしが替わろうか？」

#「だめだよ。せっかくうまくいっているのにさ」

#「でも」

#「あたしね、体育会系じゃないけど、こう見えてもけっこー熱血なんだぞ」

#香穂ちゃんに額をツンとされた。う。

#「限界超えてこのあとバタンって倒れちゃっても、それってきっといい思い出になっちゃうし。クラス一丸となって盛り上がるなんて、今まで経験なかったからさ。しんどいけど、楽しんでるから、だいじょーぶ！」

#「……わかった」

#グッと親指立てた香穂ちゃんの気持ちも、伝わるから。

#だいたい、熱出してまで試合に出ようとしてたの、わたしだし……。

#「本気でムリってなったら、ちゃんと言ってね」

#「言わない！」

#「もう！」

#「来るわよ、あなたたち」

#じゃれ合うわたしたちに、紗月さんの冷静な声が飛んでくる。紗月さんだけは、試合開始からただひとり、まったく動きのキレが落ちていなかった。

#ろくに運動しているところなんて見たことないのに、なぜ。無限のスタミナをもっているのかもしれない。

#Ａ組とＢ組の点数は拮きつ抗こうしている。しかしそれは、蜘く蛛もの糸を渡るようなギリギリのバランスの上に成り立っていた。

#ただ、そんな均きん衡こうは、いつかどこかでぷっつりと途切れてしまう。

#もしかしたらＢ組だってしんどい状況で、気力を奮ふるい立たせているのかもしれない。一度逆転さえできれば、流れはＡ組に向いてくるのかもしれない。

#だけど。

#勝利の女神が微笑んだのは、どうやらＢ組のほうだった。

#

#空中で激突したふたりが、どさりと地面に叩きつけられる。鈍にぶい音がした。

#ギャラリーがどよめく。わたしもまた、慌てて駆けつけた。

#「紗月さん！」

#ずっとリバウンドを奪われ続けていたエースさんが、さすがにバスケ部のプライドが傷つけられたのか、後半はムキになって紗月さんに熾し烈れつな空中戦を挑んできていた。

#それでも紗月さんはひらりと蝶のように華麗にボールを獲って、攻めの起点を作り続けてくれていた。その一幕だった。

#「ご、ごめん！」

#エースさんが紗月さんに慌てて手を貸す。紗月さんはなんでもないような顔をして、その手を取ろうとして。

#「痛……」

#顔をゆがめた。

#「紗月さん!?」

#わたしが叫ぶと、紗月さんは不愉快そうに眉をしかめたまま。

#「うるさいわね……。大騒ぎしないで」

#「どこか打ったの!?」

#「ちょっとひねっただけよ」

#紗月さんは足首を押さえていた。

#試合はいったん中断し、Ａ組もＢ組も集まってくる。わたしは辺りを見回す。

#「だ、誰か、保健委員は」

#「大丈夫だってば」

#「いやいや、だめでしょ！　紗月さんのおみ足にそんなお怪我だとか！　ほんとに痛そうにしてるし！」

#「……別に、いつものことよ。私は痛みに弱いの。予防接種の注射にも大泣きするぐらい」

#「サーちゃん、クロコダイルに咬かまれても平然としてるでしょ！」

#香穂ちゃんが紗月さんにツッコミを飛ばす。ああもう、そんなこと言っている場合じゃないでしょ！

#しかし紗月さんは不機嫌そうに言う。

#「私が抜けて、あなたたちがＢ組に勝てるの？」

#「いや、それは」

#替えの選手がいない以上、ルールとしては誰か補充要員を探すか、あるいはそれもいなかった場合、Ｂ組がひとり抜けて４対４で試合を続けることになっていた。

#試合時間は残り４分もない。だけど、点数は相変わらず３点差で、紗月さんがいなくなったＡ組がこの点差をひっくり返せるとは思えない。

#ていうか、たぶんぜったいムリ……。だけど……。

#「それは、痛みを我慢したサーちゃんでも、同じことじゃないの？」

#Ａ組チームのみんなが思っていたことを、香穂ちゃんが代弁する。わたしは少し驚いた。香穂ちゃんはいろいろとズバズバ言う子だけど、紗月さんに対してもこんなに切り込んだ発言ができるとは思わなかったから。

#痛いところを衝つかれたとばかりに、紗月さんは視線を逸らす。

#高田さんがやってくる。

#「どうやら、ここまでのようですわね」

#「…………。別に、試合は続けられるけれど」

#「噓おっしゃいなさい。腫はれがひどくなっていくわよ」

#紗月さんに怪我を負わせてしまったエースの子は、青ざめていた。その子に、紗月さんがなるべく感情を排した声で告げる。

#「あなたのせいじゃないから、気にしないで。後で仕返しとかもしないから」

#「はっ、はい」

#紗月さんなりのジョークだったんだろうけど、やりそうだから怖いよそれは……。

#皆の見守る中、紗月さんはひょこひょこと立ち上がる。

#「まったく……。なんとも格好悪い幕切れだわ」

#「紗月さん……」

#わたしが手を貸すと、紗月さんはわたしを見つめて。

#「結局これじゃあ、お膳立てを済ませてしまったようなものだもの」

#いや、違う。紗月さんはわたしの向こう側を見ていた。

#どこを。

#「どうやら、大変なことになっているみたいだね」

#振り返ると、体育館のドアが開いてて、そこにひとりの美少女が立っていた。

#「力を貸そうか」

#金色の髪をなびかせた、王塚真唯が。

#

#高田さんが憎々しげにその名前を呼ぶ。

#「王塚、真唯……！」

#「せめて応援に間に合えばいいと思ったのだけど、もしかしたらこれは交代要員が必要なんじゃないかい？」

#ギャラリーから歩み出てくる真唯。見学者たちが「おお……」と声をあげた。これはもしかして、Ａ組とＢ組の女王同士の戦いが見られるのでは……!?　と。

#その盛り上がりが、空気となって表に現れる前に、羽賀さんが声をあげた。

#「ちょ、ちょっと！　交代ってそんな、こっちはもう15分以上も試合しているんだよ！　今さら、ピンピンした人が加わるとか、ずるくない!?」

#あっ、すかさずそんな！

#「確かに、現場では何時間も立ち続ける仕事だ。まだまだ元気ではあるけどね。とはいえ、ソフトボールの試合でも完投してきたばかりなんだ。それじゃあ、ご不満かな」

#「ぐっ」

#羽賀さんが怯ひるんだ隙に、さらに真唯が高田さんに視線を向ける。

#「高田卑弥呼さん。君も私を降さずに、胸を張ってＢ組がＡ組に勝ったとは言い難がたいのではないかな。どうだい」

#大勢が見ている前で、そんな風に挑発された高田さんの答えなんて、決まっている。

#「……いいでしょう！　私が望むのは、ただひとつ完全勝利ですわ！　さあ、コートに入ってきなさい、王塚真唯！」

#「ふふ、そうでなければね」

#「……真唯」

#女子の保健委員に肩を借りた紗月さんは、呆あきれた顔でため息をつく。

#「わかっているでしょうね」

#「もちろん。君のためにも勝つよ。じゃなければ、君もずっと気にしてしまうだろうからね」

#「別に。私はそんなに情の深い女じゃないわ。ただ、あの子のために勝ちなさい」

#紗月さんが顎あごを向けた先には、試合が終わって駆けつけてきたもうひとり、ハラハラしながらこの状況を見守っている――紫陽花さんがいた。

#「さ、紗月ちゃん……！」

#なんでもないとばかりに紗月さんが片手をあげる。真唯が微笑む。

#「ああ、そうだね。つまり、君のためにも勝つよ」

#「……言葉の通じない女ね」

#紗月さんは不意にこっちを見た。

#「甘織」

#「あ、うん」

#呼ばれて近づくと、顎を摑まれた。

#「ふぐっ……!?」

#「あなたがなにを気にしているか知らないし、どうして集中できないのか本当はどうでもいいのだけど、でもね」

#意志の強い声。

#「選ぶというのは、それ以外を選ばないということ。しっかりと、胸に焼きつけなさい」

#その瞳は、わたしの魂をも見通しているようだった。

#「紗ひや月つきしゃん……」

#ふ、と微笑む紗月さん。

#「不細工な顔ね」

#「ひどくない!?」

#紗月さんの手を振り払って叫ぶ。

#「……ま、私はまだ諦あきらめていないのだけれど」

#「え？」

#謎の一言を残して、紗月さんがゆっくりとコートを離れていく。い、今のは一体なんなんでしょうか……？　ドキドキする。

#でも、うん。

#紗月さんの去っていったほう。紫陽花さんが紗月さんに軽く声をかけて、そして再びギャラリーの輪に加わる。その心配そうな顔を見て、わたしは大きく酸素を吸い込む。

#えこひいき。だけど、決めたから。そう言ってくれた、紫陽花さん。

#優柔不断で、中途半端で、なにをやってもうまくできないわたしだけど。

#それでも、紗月さんの言うとおり、選んだんだ。

#これがわたしの大切なものなんだ、って、そう決めたから。

#だったら、もう。

#優先順位を間違えない。

#「真唯！」

#その言葉に、周りのみんながびっくりしていた。

#わたしは学校では真唯のことを、ずっと王塚さんって呼んでいたから。

#でも、真唯だけは微笑んでわたしを見返す。

#「ああ」

#わたし、ようやく目が覚めた。

#大切な女の子のために。大切な女の子と一緒に。

#「勝とうね！　この試合！」

#ふふっ、と真唯が笑って、わたしの頭にポンと手を当てた。

#「任せてくれ。私が勝利の女神さ」

#さすがにその一言は格好良すぎて、わたしは思わずなにも言えなくなってしまった。

#

#試合は、Ａ組ボールから始まった。真唯には簡単に作戦を説明して、紗月さんの抜けた穴を埋めてもらうことにした、のだけど。

#「ギャッ！」

#ドリブルで敵陣に切り込んだ香穂ちゃんが、いともたやすくボールを奪われると、それは高田さんの手に渡った。

#「王塚真唯！」

#「やれやれ、早速盛り上げてくれるね、高田さん」

#１ｏｎ１の勝負。高田さんの前に、腰を落とした真唯が立つ。

#まるで誰も立ち入ることのできない決闘場。見物人すらも、物音ひとつ立てず、固かた唾ずを呑んで見守る中。

#「あなたを倒して、私がこの学園の頂点に立ちますわ！」

#「正直、そんなものに興味はないんだけどね」

#「……なんですって？」

#「ただ、私が負けると、友達が悲しむんだ。だったら本気でやるしかあるまいさ」

#「減らず口を――」

#高田さんがドリブルのリズムを変えた。また、あれが来る。わたしがまったく反応できず、気がついたら反対方向を抜かれていたやつが。

#わたしは万が一を想定して、真唯のカバーに入ろうとして。

#「ならば、ご覧に入れよう」

#ボールは、真唯の手にあった。

#「――な!?」

#高田さんが目を剝むく。真唯がドリブルで敵陣に突っ込んでいく。

#「そうはさせないから！」

#「いくら王塚真唯でも、この人数なら！」

#「ぜったい止めるし！」

#羽賀さんと、亀崎さん、それに根本さんが真唯を三人で囲みに行く。いくらなんでもその包囲網を抜けられるわけがない――。

#光が木立を抜けるように、真唯が三人をかわした。

#最後、ゴール手前で止めに来たエースさんが飛び上がってシュートコースを塞ぐも、真唯は高く舞い上がり、空中でボールを持ち替えて――。

#――そのまま、レイアップシュートでのゴールを決めた。

#いわゆる、ダブルクラッチという技。

#「さて、残り３分か」

#高くくくった金色の髪が、ペガサスの尻尾みたいに揺れている。

#「３点差でいいのかな？　ああ、もう１点差か」

#ま、真唯……！

#どうしよう、真唯のちゃんと格好良いところ、初めて見たかもしれない。

#なんだこの人……なんだこの人……！

#高田さんはボールを手に、檄げきを飛ばす。

#「今のはちょっと虚を衝かれただけですわ！　琴紗月でもじゅうぶん止められたんです！　あなたもいつまでもショックを受けていないで、しっかりなさい！」

#紗月さんに怪我をさせてしまったエースの子に声をかける高田さん。エースさんの瞳にも力が戻ってくる。これでもう、そう簡単には抜かせなくなった……と思うんだけど。

#真唯はちっとも気にしていない。

#それどころか。

#「紗月は運動が苦手だからね。彼女は読書が好きなんだ」

#いやいやいやいや、と香穂ちゃんが思いっきり手を横に振っていた。

#「サーちゃんが運動苦手とか、あたしたち無む脊せき椎つい動物じゃん……」

#「これが、真唯の本気……！」

#わたしや香穂ちゃんはもう完全に一般人視点。平野さんや長谷川さんなんて、すっかり目をハートにしていた。

#「ああっ、これがクインテットの女王、王塚真唯さま……っ！」

#「あまりにも麗うるわしすぎて、この目で見た映像のすべてをＨＤＤに永久保存したいです……！」

#Ｂ組はいつの間にか、羽賀さんが中心となって指示を飛ばしていた。

#「王塚真唯でも、全員を止められるわけないんだから！　全力でオフェンスがんばろ！」

#それは、その通りだ。真唯のマークが高田さんにうつったので、わたしがエースさんを担当し、香穂ちゃんがちょっと楽になったんだけど。それはそれとして、他の人にパスを回されると、どうしても点数を入れられて、点差は縮まらない。

#Ｂ組もよっぽど集中しているのか、あるいは執念か、シュートをぜんぜん外さなくなってきたため、リバウンドの機会も回っては来なかった。

#ここに来て、Ｂ組は完全に団結していた。

#皮肉にも――あまりにも強大な女王陛下、王塚真唯の存在が、Ｂ組に火をつけたのだ。

#「ひみちゃんを勝たせるんだよ！」

#「うん！　あとちょっとなんだから！」

#真唯が点数を入れ、Ｂ組がチームワークでゴールをもぎ取る。

#前半戦とは裏腹に、奇くしくも平野さんの作戦通り、ポイントの奪い合い。一進一退の攻防の中、時間だけが過ぎてゆく。

#36対37。残り時間は、もう幾ばくもない。

#できてあと１プレー。

#ボールが高田さんに渡った。正面に見据えるのは再び――真唯。

#「どうしてあなたばかり、なにもかも……！」

#「……」

#「持つ者は、すべてを手に入れるというのですか？　そんなのが、この世の中なんですか……！　あなたみたいな人に、私の気持ちはわかるはずがありません！」

#「確かに私は、恵まれている人間だ」

#「だからこそ、私はあなたに勝たなければ！　勝たなければ、私にはなにも――」

#「だけどね」

#真唯がすっと目を細めて、ささやく。

#「振り返ってごらん。君だって、誰にも負けない素晴らしいものを、もっているじゃないか」

#私はそれを、れな子に教えてもらったんだ――。

#真唯の声なき声が、わたしに届いた気がした。

#高田さんのボールをスティールして、真唯が走り出す。

#「――！」

#驚きに目を見張って、振り返る高田さん。

#そこには。

#「今度こそ、ぜったい止めるから！」

#Ｂ組の、高田さんの、大切な仲間たちがいる。

#まるで嚙みつくようにして、真唯の行く手を阻はばむ。

#ひとり、ふたり。だが、三人目を抜く前に、後ろのふたりが執念で追いついてきた。真唯の足が止まる。

#時間はもうない。

#一瞬だけど、真唯の目が左右に走る。

#ゴール前には、わたしがいた。

#わかっている。真唯がムリヤリ、ゴールに向かったりしないことを。だってこれは、わたしたちみんなで、Ａ組で摑むべき勝利なんだから。

#真唯のボールが、わたしに渡った。

#誰かが叫ぶ。

#「甘織さん、だめ――」

#それはＢ組の子の声だった。

#高田さんを大切に想う女の子の声が、わたしの手首に茨いばらの蔓つるのように巻きつく。

#シュートの体勢に入る。練習したワンハンドシュート。

#呼吸が苦しい。

#みんながみんな、幸せを願っている。

#自分の幸せじゃなくて、誰かの、大切な人の幸せを。

#全力なんだ。

#「お願い、外して！」

#だけど、わたしだって。

#「入るな！」

#どっちが正しいとか、間違っているとかじゃなくて。

#「外れろー！」

#大切な人を、幸せにしたい。

#だって、決めたんだから。

#がんばるって、わたしが、決めたんだから。

#

#「――れなちゃん！　決めてー！」

#体が軽い。

#わたしが放ったボールは。

#雨上がりの虹のような軌跡を描いて、ゴールに入った。

#スコアがめくられる。

#38対37。

#ホイッスルが鳴り響く。

#「試合終了！」

#審判の先生の声が、サウナのような体育館の空気を震わせた。

#Ａ組の勝利だ。

#

#「わたし……」

#最後はもう、シュートしたという感覚がなかった。

#ただ無心に、レティクルの中に見えたターゲットに銃弾を放つように、反射的に体が動いた。だから、実感もなかった。

#真唯がやってくる。

#「信じていたよ、れな子」

#「わたし……わたしが、決めた……？」

#「そうさ。最後は君が、入れたんだ」

#指先を見下ろす。

#「わたしが……」

#自分が、スポーツで活躍する姿なんて、想像したこともなかった。

#そんなこと言ったら、球技大会に本気になることだってありえないと思ってたし、自分がクラスに応援してもらうことも、っていうか高校入るまでは友達も恋人もできるとはぜんぜん思わなかった。

#指先が震えてる。

#「わたしが入れて……勝った」

#体の内から、これまでに感じたことのないような高揚感が、湧き上がってくる。

#これは、達成感だ。

#「れなちんー！」

#「わ！」

#「おっと」

#香穂ちゃんが抱きついてきた。押されて、真唯に抱きとめられる。

#「すごい、すごいです！　私、感動しましたぁ！」

#「高校生活の、いえ、輪りん廻ね転てん生せいしても来世に思い出としてもっていきますぅ！」

#平野さんと長谷川さんが駆け寄ってきて、ふたりは感動の涙を流していた。

#コート外には、紫陽花さんと、怪我を手当てして戻ってきたらしい紗月さんが並んでいた。紗月さんは当然でしょとばかりに、したり顔をして、そして紫陽花さんは涙ぐんでいる。

#……ありがとう、紫陽花さん。

#ボールを入れてくれたのは、紫陽花さんの最後の一押しだった。そんな気がしたから。

#あ、やば。

#なんか、終わったと思ったら、泣けてきた……！

#ぐっと涙をこらえる。今はまだ笑顔でいよう！　だって勝ったんだし！

#「やっぱれなちんはすごい！　やるう！　いちばん最後においしいところを持っていきやがって、このこのお！」

#「ちょ、香穂ちゃん!?　なんでくすぐるの!?　ねえ、ちょっと！　あは、あはははは！」

#ふと、Ｂ組を見る。

#エースの子が、改めて紗月さんに頭を下げていた。その後、嘆たん息そくした紗月さんが手を差し出すと、ふたりは固い握手を交わした。もしかしたら、バスケ部に勧誘されているのかもしれない。バスケ部の紗月さんも、きっとかっこいいと思うけどね。

#ただ……。

#高田さんはその場に崩れ落ちていて、周りをチームメイトたちが囲んでいた。

#……わたしには胸を痛めるような資格は、ないんだろうな。

#なにか声をかけてあげるべきだろうか、って思ったんだけど。

#「勝利おめでとっ、れな子クン」

#「あ、うん……耀子ちゃん」

#整列と礼が終わってからやってきた耀子ちゃんは、その背に高田さんたちをかばうように立って、苦笑いを浮かべていた。

#「なんていうか、今はそっとしておいてほしい、かな。ごめんね、身勝手で」

#「ううん」

#ここで高田さんに追い打ちをかけるようなメンバーは、クインテットにはいない。後で落ち着いたら、紫陽花さんに謝ってもらえれば、それでいい。

#「実はね、正直ちょっと、意外だった。卑弥呼ちゃんたちに勝てると思っていなかったから。すごいね、れな子クンは。たぶんきっと、もってる人なんだろうね」

#「そんなの、初めて言われた」

#わたしの言葉を謙けん遜そんと捉とらえたみたいだ。耀子ちゃんは、あははと笑う。

#「それとも、これって愛の力かな」

#「え!?」

#耀子ちゃんは、わたしの耳元にささやく。

#「ふふっ、これからもかのピちゃんと、仲良くね」

#「いや、それは、ちがっ！」

#まだ誤解が解けていない！

#勘違いされたまま、わたしのかのピ（偽）は両手を突き上げ、叫ぶ。

#「よーし！　それじゃあ、宴うたげだあああああああああああ！」

#この後、クラスで勝利の打ち上げに向かう予定があるらしい。知らなかった。

#え、わたしも人数に入っているよね？　この流れでわたしが入ってなかったら、さすがに泣くよね。女には生涯で三回泣いていい瞬間がある。産まれたとき、自分が死ぬとき、そして打ち上げにハブられたときだ。

#「いや、さすがに！」

#よかった。香穂ちゃんに保証してもらった。よかった…………。

#ただ、すかさず笑みを浮かべながら、わたしをからかってくるのが、香穂ちゃん。

#「ふたりっきりのラブホ打ち上げ♡　は、その後にやってもいいしね♡」

#「しませんけどね!?」

#そういうことを耀子ちゃんに聞かれたら、ますます誤解されるんだから！　やめてくださいよね!?

#わたし、ただでさえ恋人ふたりもいるんですから！

#

#こうして、わたしの球技大会は終わりを告げた。

#最後の最後まで波乱たっぷりで、心も体もへとへとになっちゃうような出来事だったけど……終わってみれば、うん、楽しかったような気がする。

#大会そのものだけじゃなくて、そのために公園で練習したことも含めて。

#できることができたからじゃなくて、できないことができるようになったからこその、達成感、だよね。

#ちょっとできすぎかもしれないけど……我ながら、今回はがんばったと思いますので。

#わたしの憧れた『特別』な四人と肩を並べて歩くほどには、まだ難しいけど。

#打ち上げ先のファミレスで、みんなに褒ほめてもらえているわたしのことを、わたしもちょっぴりは。

#褒めてあげてもいいかな、って気分に、なれたんだ。

#グループ名『5déesse の間』（４）　その５

#

#

#姫百合：……お疲れ様。

#鶴ちゃん：やられちゃったわね。

#姫百合：甘あま織おりれな子ちゃん、か。最後の最後にぜんぶ、もってかれちゃったね。

#鶴ちゃん：大人しくて、女の子っぽくて、かわいいだけの子だと思っていたのに。

#miki：根性あったね、意外と。

#鶴ちゃん：シュートも、よっぽど練習したんでしょうね。

#姫百合：だてにクインテットの一員じゃなかった、ってことかあ……。

#姫百合：……ひょっとして、人畜無害を装よそおって、あの子が真のクインテットのリーダー!?

#鶴ちゃん：いや、さすがにそれは。

#miki：そういえば、王おう塚づか真ま唯いを『真唯』って呼んでたよーな……!?

#鶴ちゃん：あり得ない話でもないってこと……？

#姫百合：あーもう！

#姫百合：あんなことまでして、ひみちゃんを勝たせてあげたかったのになあ……！

#クイーン：あんなこと？

#姫百合：え!?　ひみちゃん!?

#クイーン：いったいなんですの？

#姫百合：いや、それは、あはは、なんでも。

#姫百合：……えっ!?　電話!?

#鶴ちゃん：え、えっと。

#鶴ちゃん：そ、そういえばあの子、照てる沢さわさんと仲良さそうにしてたわね。

#miki：そ、そだったね！

#鶴ちゃん：照沢さんって、誰とも仲良くないのに、誰とでも喋しやべるから、不思議な距離感よね。

#miki：うん。

#miki：最初に 5déesseゴツデイス でＡ組に宣戦布告しに行ったときも、なんかひょっこりいたね。

#鶴ちゃん：……そういえば、どうして四人しかいないのに 5déesse って言うの？

#miki：クインテットが五人だから、4déesseシデイス だと人数で負けているから、じゃないかな……。

#miki：５億 déesse にしようとしてたのを、鈴すず蘭らんちゃんが止めてた。

#鶴ちゃん：もしグループ名が５億 déesse だったら、私は抜けてたわね。

#miki：……だね！

#

#